慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	老媼夜譚(佐々木喜善著, 郷土研究社發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.4 (1927. 12) ,p.157(631)- 157(631)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19271200-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

おける民間傳承の集錄であつて、『傳說と故事』と『民俗、俗信、行事』との二編に分れ、ところどころ南方熊楠氏の追記を附し、この地方の研究資料として貴重なる文獻である。たゞそれらの記事の中訂正すべきと思ふ點は、『女の働く風習』の一項である。それによれば口熊野から沿海三輪崎までの間においては、女が働いて男を遊ばせて置く風があるやうであるけれども、これは全く誤解である。評者もこの地方に生れ育つたものであるけれども、かゝる風習は未だ見聞したことはない。野良の仕事に女も關與することは、何處においても見られることであるが、その他の勞働に女の從事するのは、男が漁夫、船乘、或は海外出稼者として不在であるとか、或は男が在鄕して他の仕事に從事してゐても家が貧しいとかの場合に、家計の一助として働くにすぎない。この地方に海外出稼者の多いことをもつて、女が働く故に男が海外へでる風を生じたとみるのは、原因と結果とをとりちがへたのであつて男を遊ばせて置くのを女の誇りとする風習があるのならば、男は何を苦んで海外へなど出るであらうか。この問題については地方民の經濟生活を顧るべきであらうと思ふ。特殊の例をもつて一般の風であるかのやうに誤解することは、他の場合においても往々にして陷る危險であつて、民俗採集には特に注意すべきことであらうと思ふ。本書は爐邊叢書の一册として最近公にされたものである。（松本芳夫）

老媼夜譚（佐々木喜善著　鄕土研究社發行）

東北地方の昔話蒐集家として、すでに爐邊叢書の中において江刺郡昔話や紫波郡昔話等の著書を公にしたる著者が、いまた鄕土研究社第二叢書の中において、一百三編の昔話を包含する老媼夜譚を公にされた。民譚採集の困難をすこしでも經驗してゐるものにとつては、本書におけるこの多數の昔話が主として一老媼から聽き得たといふ著者の幸運は、まことに一つの羨望であるとともに、また著者の大なる熱心とたえざる努力とには、全く敬服せざるを得ない。その上著者の用意は文章の上にまでそゝがれ、その平明な文體とほどよい方言の混用とは、讀者をして實際に老媼の話をきくかのやうな感じをさへ起させるほどに、昔話にふさはしい文章である。從つてこの多くの昔話はいづれも非常に面白い。しかし吾々にとつては昔話は單に面白いばかりではない。やはりそこに民衆の生活の反映がなければならぬ。例へばこれらの昔話において、狐や蛇や其他の鳥獸蟲魚が人間と同じやうに活動するが、これらの事實は要するに人間と自然及び自然界における他の生物との關係が、今日よりも遙かに親密であつた時代の記憶である。或はまたこれらの話の比較研究によつて、時代や地方や民族性の特徵をみることもできよう。

時代の急激な變化のために、前代の民衆生活にとつて極めて關係の深かつたものが多く滅びんとしつゝある今日、やはり同じ運命のもとにある昔話を保存することは、前代の理解のために極めて有意義である。こゝに著者の勞を多とせねばならない。（松本芳夫）